

角倉一族とその時代 ◆ 目次

【第一部】 吉田・角倉家の系譜

第一章	はじめに——本書のめざすところ——	森 洋久	0 0 3
第二章	角倉了以・素庵の人物像——近世く近現代に強調された側面——	若松正志	0 1 1
第三章	土倉としての角倉——角倉吉田と「嵯峨土倉中」——	河内将芳	0 3 9
第四章	角倉家と公家・武家・寺社との関係——中世における——	河内将芳	0 5 5
第五章	幕府上方支配における幕臣・京角倉家と嵯峨角倉家	菅 良樹	0 6 9

【第二部】 吉田家の医業

第一章	近江の吉田家と京都進出に関する仮説	奥沢康正	0 9 7
第二章	医家吉田家の家系図と人物像		0 9 9
第三章	患者としての角倉了以と素庵・光由の病		1 2 5
第四章	吉田・角倉一族の人びとの平均寿命の比較		1 3 7
第五章	吉田称意館が所有した医学関係書		1 4 1
第六章	嵯峨医学舎		1 4 7

【第三部】 社会基盤と角倉

第一章 土木技術

第一節 高瀬川

第二節 資料紹介・高瀬川の発掘調査成果

第三節 菖蒲谷池隧道

第四節 森幸安の地誌・地図に記された角倉関連情報

第五節 穴太衆積み

第六節 洛西・嵯峨野の庭園とその技法

第二章 水運

第一節 保津川下り船頭の操船技術と精神

——角倉伝来の技術を継承する保津川船頭の仕事から——

第二節 保津川下り——江戸時代に観光としての保津川下りはあったのか——

第三節 嵯峨嵐山の薪炭商小山家について

第四節 富士川舟運について

第五節 近世オランダにおける水運事業と測量

第三章 御土居敷と角倉与一

福本和正

154

鈴木久男

167

福本和正

172

辻垣晃一

183

粟田純司

192

金久孝喜

204

豊田知八

222

上林ひろえ

242

鈴木久男

257

石川武男

268

中澤 聡

285

中村武生

301

【第四部】 海外貿易と船の技術

第一章 清水寺の角倉船絵馬

坂井輝久

325

第二章 角倉家と朱印船貿易

第三章 了以・素庵父子の生涯——安南貿易と治水事業を軸にして——

第四章 朱印船時代における「日本前」船と南シナ海の造船事情

佐久間貴士

葉山美知子

金子 務

345

361

401

【第五部】 算術

第一章 『塵劫記』から和算へ

第二章 吉田光由と続く数学者

第三章 近世の暦と天文学

第四章 西洋数学と和算

小寺 裕

鳴海 風

小林龍彦

森 洋久

439

461

481

499

【第六部】 嵯峨本と古活字

第一章 嵯峨本の特徴と魅力について

第二章 嵯峨本の世界

第三章 嵯峨本 謄本

第四章 〈嵯峨本〉以前の古活字版について

林 進

高木浩明

伊海孝充

森上 修

523

555

577

595

角倉研究プロジェクト 研究発表一覧

615

執筆者紹介

【第一部】 第一章

はじめに——本書のめざすところ——

森 洋久

京都の嵐山、亀山公園に、角倉了以像は鉄槌をキつと地面に突き立て、じつと遠方を眺めている。保津川を開削し、丹波と京都、大阪を結び、材木や米等の物流を可能とした。また、山梨県みづか鰍沢のほど近い山中、山梨県富士川のほとりの甲西道路沿いには、了以の富士川の浚渫工事を讃えて富士水碑が立てられている。徳川家康の命で了以が手がけたとされる、この富士川もまた、近世より塩、米、木材の大動脈であった。このように、角倉家のひとつのイメージは、私財を投じて水運を中心とした物流開発を行い、通行料の徴収で投資を回収した近世の大事業家である。伴蒿蹊『近世崎人伝』（寛政二年（一七九〇年）の「角倉了以」の項には、

先大石は轆轤索をもて牽ひ之をヲ。水中にあるは、其上に高く足代をかまへ、鉄槌の頭尖りて、長さめぐり各三尺、柄の長サ二丈あまりなるに、あまたの索を結付、数十人して其槌を引あげて、直に落せば、巖石ことごとく砕けぬ。

とあり、保津川の開発事業が描かれている。『近世崎人伝』の了以の描写は明治期に道徳の教科書などに引用され、この了以のイメージが定着していったようだ。たとえば、明治三〇年『少年世界』臨時増刊第参巻第四号には立志談「治水長者」として、角倉一族の活躍が描かれている。第五回、六回が「大堰川おほい」であり「富士川、天龍川」「高瀬川」「大悲閣」と続く。

同書の、第二〜四回では「安南国 上、中、下」と、安南貿易の物語がつづく。角倉のもう一つのイメージは安南貿易である。清水寺に安南貿易に使つたとされる角倉船の描かれた絵馬が奉納されている。舟の調達、船頭、乗員に対する『舟中規約』も伝わっている。

ぼつかり大きな雲の中 あれあれお船が見え出した南の国から御朱印船 みんなでお迎えおめでとう

と始まるのは童謡『角倉船』（出雲路敬和作詞、樋口昌道作曲）の冒頭である。『貿易・開鑿・出版の先覚者 大角倉父子』二号にある童謡で、出雲路敬和は、下御霊神社歴代宮司出雲路家の出身で國學院大學国文科卒、立命館大学教授、成安短期大学学長、醒泉小学校、明倫小学校の校歌の作詞も行っている。作曲家樋口昌道もさまざまな校歌を作曲している。

最後に、現代の論文、武藤信夫、齋藤陽一著「角倉了以・素庵」（『日本経営倫理学会誌』第九号、二〇〇二年）を参照しよう。

①貿易の代表として交易の原点に普遍的倫理「信」を提唱。貿易に関しては「利は義の嘉会なり」の「船中規約」を実践。

②日本で最初の社会性、公益性ある地域開発（河川開削、通運）事業を自己資本で行ったわが国の起業家の始祖である。

③企業家として学者でもある素庵は、学術、文化への有力な支援者であった。

とある。次章で若松正志も論じるように、近現代において、角倉一族は、公益性という面において、一つのシンボルの存在となっていた。一方で、右論文では三番目に着目されている、学術、文化のイメージはやや影にかくれる。『少年世界』臨時増刊第参卷第四号にも控えめながら吉田光由の名は登場しているが、やはり公益性、事業家のイメージにくらべると角倉の学者のイメージはやや劣る。吉田光由の『塵劫記』や角倉素庵の嵯峨本は、「有力な支援者」どころではなく、それぞれがその筋の一流であり、近世の和算や木版摺刊本の原点を築き上げたといえるものである。

『国史大辞典』（吉川弘文館）によれば、吉田宗臨（若名忠兵衛）が、嵯峨の地に土倉・酒屋としての家業を始め、そ

の倉の名称から角倉の流れが始まる。だがそれ以前をたどると、そもそも角倉家の本姓は吉田であり、近江佐々木源氏の一流で、宇多天皇の後裔佐々木秀義の六男嚴秀が吉田の里（滋賀県犬上郡豊郷町吉田）に封邑を得て、吉田を名乗ったとされる。一〇代徳春が応永年間（一三九四～一四二八）に上洛し、室町幕府に仕え、正長元年（一四二八）のころ京都嵯峨（京都市右京区）に定住した。そのころの職は方術と伝えられるが、神業に近い医術だったと推察されるという。その後、徳春の曾孫の宗桂より医家が輩出され、明治にいたるまでつづいている。しかし、医家一族の史料は少なく、角倉家の一族の本流は吉田と名のる医家であることは思いのほか知られていない。本来、正確を期すならば「角倉家」ではなく、「吉田・角倉家」と呼ぶのが正しい。

我々の吉田・角倉家の調査は、平成一三年度～平成一七年度に行われた国立科学博物館の全国的な近世の日本の科学技術の研究調査「我が国の科学技術黎明期資料の体系化に関する調査・研究」（通称「江戸のものづくり」）において、角倉家の史料や研究を調査したことが始まりである。このときの史料調査をベースに、吉田・角倉一族をもう一度俯瞰的にみなおしてみようということでも国際日本文化研究センターに集まり、各分野の研究者による学術研究を相互に関連づけて議論し合った。それが企画室共同研究『近世初期における京都の文化力・技術力に関する比較研究——角倉一族を中心に——』（平成二四年～二六年）である、当研究の発表題目は、巻末の研究発表一覧に掲げたように多岐にわたった。

吉田・角倉一族が中世から現代にかけて、事業、経済、学問などの日本社会のさまざまな面において少なからず影響を与える存在であったことは間違いない。だが、議論を戦わせて徐々に見えてくることは「角倉了以が開鑿する」ということはどういうことなのだろうか、という疑問であった。たとえば「東京都庁舎は丹下謙三が造った」ともいえる一方で、「大成建設をはじめとした共同企業体が造った」ともいえる。あるいは「鈴木俊一が造ったのだ」という人もいるだろう。だが実際に鉄骨を組み、コンクリートを流し込んだ無名の多くの人びとの手によるともいえるし、東京都民

だともいえる。多くのこのような言説が渾然一体となったものが「丹下健三の仕事」である。もし、東京都庁舎の成立を論じたいならば、どれか一つだけをクローズアップすることは恣意的である。

冒頭の了以像のように、了以自身が本場に鉄槌を握っていたか、逐語靈感的に捉えるのは早まり過ぎであることにはすぐ気づくであろう。また、石川武男によれば、富士川水運に角倉が関与したことが分かる明確な史料は、富士水碑と『近世畸人伝』以外にみつけないことが出来ないという。さまざま言説や碑はどこかで伝説と化している部分がある。近代、現代の多様な物語もまたしかりである。どうやら、渾然一体となった「角倉」を、ひとつひとつ実証的に解きほぐし、実態はどうだったのか明らかにしていく必要があるそうだ。これが本書『角倉一族とその時代』の一つ目の目的である。

しかしもう一つの視点を提示しておこう。東京都庁建設にあたって、コンクリートを流し込んだ労働者たちの記録は果たして残っているだろうか。現代であれば、いろいろな資料も残っているかもしれない。だが、それも、資料の保存期間を過ぎ破棄されていく。角倉が関わった多くの事業もそうである。幕府や役所の史料は保全されていて、職人の日々の仕事は消えていく。記述された史料として存在しないものを「わからない」として済ませてしまうのは正直なようではあるが、一方で「わかる」ことだけから構築されたものは偏った角倉像となる。

大きな組織や事業はリーダーを必要とする一方で、リーダーだけではなにも成り立たない。多くの優れた人材あつてのことである。数々の伝説は、対象の規模の大きさ、組織力を示している。中には、歴史的に記述されることに興味をもたない人物、職人や町衆といった人びとも関わっている。かれらは記述されたものを残さない一方で完成されたものを伝承している。「わからない」ことを排除していく歴史学的否定論の一方で、残ったものから「わからない」ことを推測しようとする肯定論、この二面から、もう一度吉田・角倉を眺めてみると、近世の人材と技術の新しい関係が見えてくる。

研究班では、研究者にとどまらず、おそらく角倉一族も活用したであろうという伝統的な技術を、船頭、技師の方々も交え、ご発表いただいた。紙面の都合でその発表のすべてを本書には盛り込むことが出来なかったことは残念だが、意図したところをおおよそ盛り込むことが出来たと考えている。

本書は、吉田・角倉家のイメージが、近代、現代にどのように形成されてきたかという若松正志の議論から始まる。我々が掛けている色眼鏡について自覚しておく必要がある。これを踏まえて、第一部は角倉の全体像をとらえる。土倉の生業から始まる吉田・角倉家は、その後大きく三つの家系に分かれる。一つは医者、一つは学者、一つは実業家を中心とした家系である。しばしば実業家の系譜がクローズアップされがちであり、その次に吉田光由に代表されるような学者の系譜がフォーカスされる。土倉、幕臣としての角倉家について、その系譜と当時の社会における位置づけについて、河内将芳、菅良樹に論をいただく。この第一部で三つの家系を対等に論じたいところだが、医家としての吉田家に関する資料は少なく、他の系譜と同等に論じることがなかなか難しい。したがって、医家の系譜については第二部に別立てし、列伝的な方法で奥沢康正に論じていただくこととした。この第一部と第二部をあわせることで、角倉家の、中世から幕末、明治にかけての社会的影響力の強さが理解できよう。三つの系譜の各人物はお互いの持ち場を生かし、絡み合うことで、影響力と持続力を生み出したといえるかもしれない。

第一部と第二部において、我々はこの一族のなした具体的な業績の世界へ入って行く準備がととのう。第三部は社会基盤、第四部は海外貿易、第五部は和算、第六部は嵯峨本と古活字をとりあげた。各テーマについて、歴史学的になにがわかり、なにがわからないのか、吉田・角倉の全体における位置づけが明らかにされる。一方で、吉田・角倉から少し広い範囲に視野を移し、当時の技術や伝承を、その伝承者たる現代の職人や技術者たちに語っていただくことで、記述されない部分を補完していく。

第三部は水運に関わる土木技術、船頭の技術、そしてそれらを組み合わせ、事業として成立させる組織管理にフォーカスを当てている。具体的には、かつては物流路として、現代は観光地として名高い保津川の川下り、高瀬川、富士川の開削の事例、最後に御土居敷おどいやぶの管理組織の事例をあげる。第四部では、朱印船による海外貿易の歴史と技術に迫る。清水寺に伝わる朱印船の描かれた絵馬についての坂井輝久の論考から始まり、朱印船貿易の歴史について佐久間貴士に論じていただく。葉山美知子は実際にヴェトナムの各地を訪れ、エッセイ風の論を展開する。最後の金子務の論文は朱印船の造船技術に迫るものである。

吉田・角倉家の学者家業の代表といえは算術であろう。特に吉田光由の『塵劫記』はその後の和算の礎を築いた。第五部では、『塵劫記』およびその後の日本の算術Ⅱ和算の系譜について、小寺裕はその内容から迫り、鳴海風は歴史的系譜から迫る。小林龍彦には和算をも含み、近世において実用的な問題であった暦と天文学について論じていただく。最後に拙稿にて、和算とはなにかということを知る一つの試みとして西洋数学との論法の比較を行った。

最後の部となる第六部は嵯峨本がテーマとなる。嵯峨本は土木や海外貿易といった事業とはまた異なった「事業」である。多くの彫師や摺師たちの関わる事業である一方で、文化的美術的な価値を追求したものであり、最高水準の木活字、製紙技術によるものである。元来、素庵と光悦が中心となつて行われたものと考えられ、その真贋判定が研究の中心であったが、林進の研究により、素庵の人となりや成立の歴史的背景に焦点が当てられ、新たな説が提示される。これにつづき、嵯峨本の連本れんぽん、謡本うたいほんについて、それぞれ高木浩明、伊海孝充に解説、論じていただく。森上修は長年、嵯峨本の活字の比較研究を行っており、活字の陰影から各本の関連を解き明かしている。

「角倉一族」とは、吉田・角倉家だけではなく、同家と相互に関係をもちながら、その偉業の一部をなした人びとも含むかもしれない。人びと、さまざまな事業、技術や史料を俯瞰することによって、「角倉一族」もしくは「吉田・角倉家」の業績とはなにかを、文化、技術の総体の中でもう一度問いかけてみることであれば本書の目的を達成

できたといえよう。

あらためて、技術者は寡黙である。彼らの名前は文書に記されるものでもなく、彼らは、はなからそれを望まない。彼らの残した作品や事物そのものが彼らの名前であり叙述である。吉田・角倉家は中世、近世という土壌に埋もれた彼らを根から吸い上げ果実として実らせる樹木のようなものなかもしれない。どの果実がどの根に通じるものなのか、我々には知るすべはない。あからさまな対応関係を強要することは伝説を生み出す。だが、土壌があつてこそ果実が実り、また、樹木なくしても果実は実らない。このような総体的な互助関係が「事業」というものだ。

最後に、本研究お力添えくださった角倉家の方々、および史資料のご提供など多方面でご協力下さった方々に、執筆者を代表して感謝いたします。なかでも「江戸のものづくり」「角倉フォーラム」の時代から十数年間にわたり研究の組織化に多大なご尽力をくださった宇戸典之氏に感謝します。

〈平成23年度〉

第1回研究会…平成23年5月14日(土)、15日(日)

◆平成23年度テーマ選定の討議について

第2回研究会

・平成23年7月9日(土)

◆二条城の角倉移築建物の写真の紹介

◆GLOBALBASEと角倉関連の地図・絵図

◆角倉関係の資料について

・平成23年7月10日(日)

◆戦国期の土倉としての角倉

◆嵯峨本について

第3回研究会

・平成23年8月27日(土)

◆近世オランダにおける治水の伝統と内陸水運網の発達

◆塵劫記前後の日本の測量術

・平成23年8月28日(日)

◆小山家について

◆江戸時代の算盤(大垣田中家)について

◆日本庭園の概要

西澤英和

森 洋久

宇戸典之

河内将芳

森上 修

佐藤賢一

中澤 聡

鈴木久男

宇戸典之

金久孝喜

第4回研究会

・平成23年11月5日(土)

◆菖蒲谷池隧道の地形上の位置と構造について

◆菖蒲谷周辺の鳴滝砥石の採掘の歴史

◆大悲閣と周辺建物の現況について

・平成23年11月6日(日)

◆天理図書館蔵嵯峨本『三十六人歌合』の版下筆者を考  
える―新出『本朝名公墨寶』(慶安元年本)素庵巻との  
筆跡検証から―

◆嵯峨本の版本学的考察

第5回研究会

・平成24年1月21日(土)

◆嵯峨本の数理的分析に向けて

◆京都観光と明治の挑戦

・平成24年1月22日(日)

◆近世京都における角倉氏―商人として、代官として―

◆江戸時代に観光としての保津川下りはあったのか

◆若松正志

師 茂樹

清水宏一

若松正志

上林ひろえ

福本和正

宇戸典之

西澤英和

牛見正和

森上 修

森上 修

若松正志

清水宏一

若松正志

若松正志

若松正志

若松正志

若松正志

若松正志

若松正志

若松正志

若松正志

## 第6回研究会

- ・平成24年3月10日(土)
- ◆森幸安の地図を眺める  
辻垣晃一
- ◆了以からはじまり、了以で再構築された、保津川の将来的展望  
豊田知八
- ◆保津川をめぐる人と舟運  
豊田覚司
- ・平成24年3月11日(日)
- ◆日本の古天文学と暦  
白井 正
- ◆測量技術により明らかにされた平安京  
宮原健吾
- ◆角倉一族の系図について  
吉田周平

## 〈平成24年度〉

### 第1回研究会

- ・平成24年5月12日(土)
  - ◆嵯峨・嵐山周辺の吉田・角倉関係の遺蹟現地調査
  - ・平成24年5月13日(日)
  - ◆江戸時代における吉田・角倉一族の医学に関する系譜  
奥沢康正
  - ◆塵劫記と和算  
小寺 裕
  - ◆菖蒲谷池と角倉隧道  
福本和正、宇戸典之
- ### 第2回研究会
- ・平成24年7月7日(土)
  - ◆保津川通船工事に関する考察  
宮田 章
  - ◆近世町衆の経済倫理―舟中規約を中心に―  
船橋晴雄
  - ・平成24年7月8日(日)

### ◆CSRとそのインプリケーションについて

島本晴一郎

### 第3回研究会・平成24年8月31日～9月1日

- ◆富士川舟運調査(群馬県鯉沢周辺/調査、富士川下り/交流、静岡県富士市内/調査)

### 第4回研究会

- ・平成24年11月10日(土)
- ◆富士川舟運調査について  
森 洋久
- ◆朱印船貿易と角倉家  
佐久間貴士
- ・平成24年11月11日(日)
- ◆角倉家と清水寺  
坂井輝久
- ◆穴太衆  
栗田純司
- ◆吉田光由が著した『塵劫記』が後世に与えた影響―天文暦学と時計技術―  
鳴海 風

### 第5回研究会

- ・平成25年1月26日(土)
- ◆御土居敷と角倉家  
中村武生
- ・平成25年1月27日(日)
- ◆富士川渡船と舟運について  
石川武男

### 第6回研究会

- ・平成25年3月9日(土)
- ◆高瀬川漏水復旧工事(二条・御池間)について  
福本和正
- ・平成25年3月10日(日)

◆角倉了以・素庵の人物像―多様な資料から考えるための序論―  
若松正志

◆角倉船を追いかけて―ベトナム安南―  
葉山美知子

◆嵯峨本諸版に関する Digital 画像の公開状況について  
森上修

〈平成25年度〉

第1回特別研究会…平成25年5月14日(火)

◆大阪市立美術館にて、同館収蔵の「角倉船絵馬図」の屏風の現地調査

第2回研究会…平成25年8月24日(土)

◆成果報告書出版に関する打合せ

執筆者紹介(収録順, \*は編者)

\*森 洋久(もり ひろひさ)

1968年生。東京大学理学系研究科情報科学専攻博士課程退学。博士(情報理工)。国際日本文化研究センター文化資料研究企画室准教授。

『森幸安の描いた地図』(共編, 日文研叢書29, 2003年), "Development and research of the GLOBALBASE architecture -- Diversity of <maps> and spatial information, and a framework for those autonomous distributed sharing"(学位論文・東京大学大学院情報理工学研究科コンピュータ科学専攻, 2010年), 『情報とは何か』(総合研究大学院大学・学融合水深センター研究費助成プロジェクト「日本における諸科学の変性と基礎概念の検討——文理融合の有効性をさぐる——」報告書(平成24～25年度代表鈴木貞美), 2014年)。

若松 正志(わかまつ まさし)

1963年生。東北大学大学院文学研究科博士後期課程中退。京都産業大学文学部教授。

「近世中期における貿易都市長崎の特質」(『日本史研究』415, 1997年), 「後桜町天皇宸記」宝暦13年8月～明和元年7月条(後桜町女帝宸記研究会として共著, 解説執筆, 翻刻分担, 『京都産業大学日本文化研究所紀要』7～16, 2002～2011年), 「イエズス教会領から「長崎口」へ」(荒野泰典・石井正敏・村井章介編『地球的世界の成立』〈日本の対外関係5〉吉川弘文館, 2013年)。

河内 将芳(かわうち まさよし)

1963年生。京都大学大学院人間・環境学研究科博士課程修了。奈良大学文学部史学科教授。

『中世京都の民衆と社会』(思文閣出版, 2000年), 『中世京都の都市と宗教』(思文閣出版, 2006年), 『祇園祭の中世——室町・戦国期を中心に——』(思文閣出版, 2012年)。

菅 良樹(すが よしき)

1964年生。兵庫教育大学大学院連合学校教育研究科社会系教育講座博士後期課程修了。博士(学術)。淳心学院中・高等学校教諭。

『近世京都・大坂の幕府支配機構——所司代 城代 定番 町奉行——』(清文堂出版, 2014年), 「嘉永・安政期の大坂城代土屋寅直と城代公用人大久保要」(宮地正人監修『幕末動乱——開国から攘夷へ——』土浦市立博物館等四館共同企画展図録, 2014年), 「大塩事件に対処した大坂城代土井利位と戊午の密勅降下に関わった同土屋寅直」(『大塩研究』72号, 2015年)。

奥沢 康正(おくざわ やすまさ)

1940年生。大阪医科大学卒業後、京都府立医科大学助手。奥沢眼科院長。

『京の民間医療信仰——安産から長寿まで——』(思文閣出版, 1991年), 『外国人のみたお伽ばなし——京のお雇い医師コンケルの『扶桑茶話』——』(思文閣出版, 1993年), 『目医師達の秘伝書と流派』(山田慶児・栗山茂久共編『歴史の中の病と医学』思文閣出版, 2004年)。

福本 和正(ふくもと かずまさ)

1939年生。京都大学大学院工学研究科(建築学専攻)博士後期課程修了。元滋賀県立大学環境科学部教授。

“STUDY ON HORIZONTAL STRENGTH OF TRADITIONAL WOODEN HOUSES BY TESTS IN SITES” (13<sup>th</sup> World Conference on Earthquake Engineering, No.2197, 2004), “AMPLIFICATION OF SEDIMENTARY LAYERS AND ESTIMATION OF THEIR STRUCTURES IN SHIGA PREFECTURE, JAPAN” (12<sup>th</sup> World Conference on Earthquake Engineering, No.1335, 2000), 「壁土のせん断強度の実験的研究」(『日本建築学会構造系論文集』530号, 2000年)。

鈴木 久男(すずき ひさお)

1951年生。奈良大学文化学部史学科卒業。京都産業大学文化学部教授。

「平安京の邸宅と庭園」(鈴木久男・西山良平編『恒久の都 平安京』吉川弘文館, 2010年), 「発掘された室町将軍の庭」(奈良文化財研究所編『室町時代の将軍の庭園』奈良文化財研究所, 2013年), 「鳥羽離宮庭園から見た鳥羽上皇の浄土観」(白幡洋三郎編『「作庭記」と日本の庭園』思文閣出版, 2014年)。

辻垣 晃一(つじがき こういち)

1972年生。龍谷大学大学院文学研究科博士後期課程依願退学。京都府立須知高等学校教諭。

『森幸安の描いた地図』(日文研叢書29, 2003年), 「森幸安の地図を追って——函館市中央図書館と国立国会図書館における調査報告——」(『日本研究』32, 2006年)。

粟田 純司(あわた じゅんじ)

1940年生。近畿大学理工学部土木工学科卒業。(株)粟田建設会長。

金久 孝喜(かねひさ こうき)

1949年生。大阪工業大学工学部土木工学科卒業。(株)中根庭園研究所設計部長。

豊田 知八(とよた ともや)

1966年生。立命館大学文学部地理学専攻卒業。保津川遊船企業組合代表理事, 京都大学東南アジア研究所連携研究員。

「愛宕山麓の小集落・清滝 ふるさと再生へ可能性を求めて」(京都大学東南アジア研究所 実践型地域研究最終報告書『ざいちのち』2012年)。

上林ひろえ(かんばんやし ひろえ)

1979年生。京都産業大学理学部計算機科学科卒業。京都学園大学職員・京都産業大学日本文化研究所上席特別客員研究員。

石川 武男(いしかわ たけお)

1972年生。日本大学文理学部史学科日本考古学専攻卒業。富士市市役所文化振興課職員。

中澤 聡(なかざわ さとし)

1976年生。東京大学大学院総合文化研究科博士課程満期退学。東京大学大学院総合文化研究科特任研究員。

“The development of river management: Tone River” in *Urban Water in Japan* (London: Taylor & Francis Group, 2008), 「ポー水系からラインデルタ：ウィレム・ヤーコブ・ス・グラッフェサンデの河川水理学研究に見られるイタリア学派の影響の検討」(『科学史研究』51号, 2012年), “Mixed Mathematics, Physico-Mathematics, and the Legitimacy of Experience: A Case Study from Eighteenth-Century Fluid Resistance Research” (*Historia Scientiarum* 23-2, 2013).

中村 武生(なかむら たけお)

1967年生。佛教大学大学院文学研究科博士前期課程修了。京都女子大学文学部非常勤講師。

『御土居堀ものがたり』(京都新聞出版センター, 2005年), 『池田屋事件の研究』(講談社, 2011年), 『幕末期政治的主要人物の京都居所考——土佐・長州・薩摩を中心に——』(御厨貴・井上章一編『建築と権力のダイナミズム』(岩波書店, 2015年).

坂井 輝久(さかい てるひさ)

1948年生。京都大学文学部卒業。音羽山清水寺学芸員。

『洛中洛外漢詩紀行』(共著, 人文書院, 1994年), 『江戸の世に遊ぶ——生田耕作所蔵書画展——』(編著, 奢瀾都館, 1995年), 『京都 紫式部のまち——その生涯と『源氏物語』——』(淡交社, 2008年).

佐久間 貴士(さくま たかし)

1949年生。青山学院大学大学院文学研究科修士課程修了。大阪樟蔭女子大学国際英語学科教授。

『よみがえる中世 2 本願寺から天下へ 大坂』(編著, 平凡社, 1989年), 「発掘された中世の村と町」(『岩波講座日本通史 第9巻 中世3』岩波書店, 1994年), 「日本の都市とホイアン」(『日本列島に生きた人々 2 遺跡(下)』岩波書店, 2000年).

葉山 美知子(はやま みちこ)

1947年生。お茶の水女子大学大学院服飾美学専攻修士課程修了。日本医史学会代議員。

『寝姿ものがたり』(文芸社, 2009年).

金子 務(かねこ つとむ)

1933年生。東京大学教養学部教養学科科学史・科学哲学分科卒業。大阪府立大学名誉教授。

『アインシュタイン・ショック』全2巻(河出書房新社, 1981年。岩波現代文庫所収), 『江戸人物科学史』(中央公論新社, 2005年), 『宇宙像の変遷』(放送大学叢書, 左右社, 2013年).

小寺 裕(こてら ひろし)

1948年生。信州大学理学部数学科卒業。東大寺学園中・高等学校専任講師。

『博学検定 江戸の数学和算』(技術評論社, 2010年), 『関孝和算聖の数学思潮』(現代数学社, 2013年), 『ススメ! 算法少年少女』(みくに出版, 2013年).

鳴海 風(なるみ ふう)

1953年生。愛知工業大学大学院経営情報科学研究科博士後期課程修了。博士(経営情報科学)。四日市大学研究機構関孝和数学研究所研究員。  
『円周率を計算した男』(新人物往来社、1998年)、『算聖伝 関孝和の生涯』(新人物往来社、2000年)、  
『江戸の天才数学者』(新潮社、2012年)。

小林 龍彦(こばやし たつひこ)

1947年生。法政大学第二文学部卒業。学位博士(学術)。前橋工科大学名誉教授。四日市大学関孝和数学研究所研究者。内蒙古師範大学客座教授。  
『幕末の偉大なる数学者——その生涯と業績——』(共著、多賀出版、1989年)、『和算家の生涯と業績』(共著、多賀出版、1985年)、『関孝和論序説』(共著、岩波書店、2008年)。

林 進(はやし すずむ)

1945年生。神戸大学大学院文学研究科修士課程修了。芸術学芸術史専攻。元大和文華館学芸員。  
『雪村』(共著、講談社、1995年)、『日本近世絵画の図像学——趣向と深意——』(八木書店、2000年)、  
『宗達伊勢物語図色紙』(共著、思文閣出版、2013年)。

高木 浩明(たかぎ ひろあき)

1967年生。二松学舎大学大学院文学研究科博士後期課程国文学専攻単位取得満期退学。博士(文学)(関西大学)。予備校・高等学校講師。  
『中院通勝真筆本『つれづれ私抄』——本文と校異——』(新典社、2012年)、『下村本『平家物語』と制作環境をめぐって』(二松学舎大学『人文論叢』58輯、1997年)、『『百人一首抄』(幽齋抄)成立前夜——中院通勝の果たした役割——』(『中世文学』58号、2013年)。

伊海 孝充(いかい たかみつ)

1972年生。法政大学大学院人文科学研究科博士後期課程満期退学。文学博士。法政大学文学部准教授。  
『切合能の研究』(檜書店、2011年)、『日本人のこころの言葉 世阿弥』(共著、創元社、2013年)、『玉屋謡本の研究(一)』(『能楽研究』38号、2014年)。

森上 修(もりがみ おさむ)

1935年生。関西大学文学部史学科卒業。元大阪樟蔭女子大学非常勤講師。  
『慶長勅版『長恨歌琵琶湖行』について(下)——わが古活字版と組立式組版技法の伝来』(『ビブリア』97、1991年)、『初期古活字版の印行者について——嵯峨の角倉(吉田)素庵をめぐって——』(『ビブリア』100、1993年)、『嵯峨本『伊勢物語』慶長十三年刊の諸版における連彫活字について——三倍格の活字駒を中心として——』(近畿大学日本文化研究所編『日本文化の諸相』風媒社、2006年)。

すみのくらしちぞく じ だい  
角倉一族とその時代

---

2015(平成27)年7月1日発行

定価：本体8,800円(税別)

編者 森 洋久

発行者 田中 大

発行所 株式会社 思文閣出版

〒605-0089 京都市東山区元町355

電話 075-751-1781(代表)

---

デザイン 関岡裕之

印刷 株式会社 図書印刷 同朋舎  
製本

---

©Printed in Japan

ISBN978-4-7842-1797-7 C3021